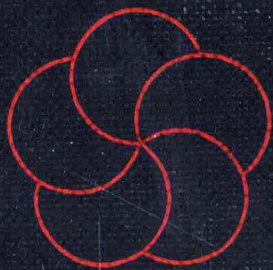
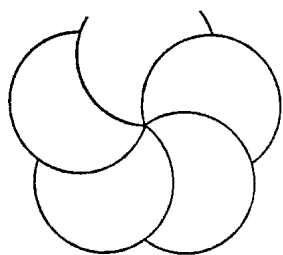


3

日本文学の歴史



宮廷サロンと才女



3 宮廷サロンと才女

日本文学の歴史

秋山 虔 山中 裕 編

日本文学の歴史 (全12巻)

第3巻 宮廷サロンと才女

昭和42年7月20日 初版発行

定価 650 円

編 者 秋 山 虔
山 中 裕
発行者 角 川 源 義

印刷所 中光印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所
製版所 株式会社 高木写真製版所
発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13
振替東京195208番
電話東京(255) 7111番

© Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

暮れゆく大和・新しき王都

万葉最後の日々 湖畔の末路 殺戮六年 沈く白壁 一木彫の源流 法のまにまに 新
 国家の律令 都を変えたる人々 佐保川の饞體 平安楽土万年春 牛を殺すな 種継暗殺
 軍事と造作の終焉

唐化の嵐

天をまつる あこがれの国 延暦の遣唐使 最澄と天台宗 空海と真言宗 大唐の諸仏
 理想化された唐 唐と日本と

神泉苑の文遊

神泉苑の菊 平安京の争い 弘仁・承和の文運 子子子子子子 小野篁と白楽天 けんか
 した遣唐使 求婚の模範文 和様化への道

万葉と古今の谷間

『万葉集』の忘却 桓武天皇の遊獵と和歌 ならのみかど 葵子の変 葵子と『万葉集』
 ふるさとの歌 恋のことば 流人の血 流人の名歌 良房と和歌 暗黒時代の終わり

六歌仙前後

三

新しき旗手 その足跡 夢の歌人 謎の女 好色の貴公子 無頼の秘密 在野の風流
業平と紀氏 親王への敬愛 二条の後のサロン 死の真実 石上と雲林院の風流 遍昭の
ゆくえ

菅原道真とその周辺

二六

菅原清公文章院を興す 学閥の争い 正統の自負 阿衡事件 讃州の自覚 昭宣公に奉る
書 榮進する儒臣 心情的理想主義 詩臣の榮光 鮮烈なる没落 孤絶の抒情 歌人道
真 悲劇の代償

和歌ルネッサンス

二四

和歌のカムバック かな文字の登場 歌合の流行 道真と和歌 寛平のルネッサンス 屏
風絵と屏風歌 才走る和歌 古今登場の舞台装置 晴れの座を得た和歌 『古今集』の世
界 撰者のほまれ 国風の旋律 貫之の位置 新撰和歌 日記文学の船出 歌に生きる
伊勢 延喜歌壇の紅一点

フィクシヨンの出現

二七

真実のそらごと フィクシヨンの契機 「ふるごと」の伝承 伝奇小説はあったか かなぶ
みの物語 物語の祖 孤独な創造 難題譚のパターンにそむいて 人間かぐや姫 富士の
煙 伝承の鬼子 いちはやきみやび 虚像の真実 歌物語の基盤 『政事要略』の歌語
り 抒情への散文的関心 すき者へのあこがれ 色好みの美德 人間の創造 美しき蛾
物語の輩出 大河小説の発明

『将門記』の世界

二〇八

鶏が鳴くあずまの国 凶猾党をなし群盗山に満つ 飯馬の党 天慶の乱とその背景 私闘の
発端 骨肉相食む 私闘から反乱へ 東国の新皇 王朝政府の動揺 将門の最期 『将
門記』の作者 合戦記の独立 追討記と反乱記 新しい文体の模索 撃ち勝つをもって君と
なす 将門伝説のひろがり 二つの将門観

怨霊信仰と仏教思想

二三三

密教宗派の発足 神仏の接近 雷神の信仰 子どもと雷 怨霊のたたり 『冥途記』とい
うふしぎな書物 怨霊から利益の神へ 怨霊の生きつづける世界 さまざまの怨霊 高まる
来世への関心 欲求不満と現世逃避 浄土教信仰の受容史 恵心僧都源信 貴族の観想念
仏 善をつむ貴族たち

黄金期への傾斜

二五八

黄金期への傾斜とは 『古今集』以後の紀貫之 歌人とバトロ 兼輔邸の小世界 小世界
の喪失 しどけない 『後撰集』 政治と文学のあいだ 『後撰集』の女性的要素 女よろし
く和歌を合はすべし 百首歌の流行と職業歌人 曾禰好忠の訴嘆調 私歌集と歌人たち 公
任の歌論と『拾遺集』

女の世界の到来

二六六

平安時代の女 女の財産権 中の品の女たち みずから求めた結婚の悲哀 はなやぐ後宮
後宮に仕える人々 政治の陰に女あり

女房文学の開花

三〇四

藝の和歌　和歌は女のせつなる抒情　歌の効用　女流歌人の群れ　ひそかに学ぶ女たち　女
のド性骨　物語と女　古物語への不信　日記文学と女　女装した『土佐日記』

『蜻蛉日記』の世界

三〇六

あつかましい求婚　幻滅の恋文　男の歌・女の歌　初夜を境に　一夫多妻制　葵の連歌
町の小路の女　歎きつつひとり寝る夜の　女の執念のむなしさ　権勢家兼家　失脚者源高明
への共感　こじれていく夫婦仲　山籠りへの道　物語での旅　鳴滝籠り　『蜻蛉日記』の
意義

歌枕をめぐる人々

三〇四

天下の一物たち　実方、陸奥へ下る　陸奥の歌枕を求めて　歌枕のはたらき　流浪の歌人、
源重之　武隈の松　季語意識の芽ばえ　紫式部の歌枕批判　大和絵と屏風歌　大嘗会と風
俗歌　まがねふく吉備　悠紀・主基の歌と歌枕　東国のくにぶり　みちのく歌の哀歎　歌
枕の成立

清少納言と中関白家

三七八

清原の家の末娘　清少納言の出仕した中関白家　気の合った主従　中関白家の悲運　主家の
逆境を描かぬ『枕草子』　宮廷讀美の書　感覺美の世界　清少納言の人間観　ナイーブな意
識　知的なまなざし　魅力の源泉　跋文をめぐる

華麗なる摂関政治

四〇二

若き日の道長 結婚前後 内覧の栄誉と伊周の失脚 栄光と敗残 仏教への関心 道長の横暴 小一条院 法成寺の造営 極楽往生 てる中将とひかる少将 顕信の出家 書物への情熱 文学のバトロンド長 保胤と具平親王 空也と保胤 匡衡の抱負と失意 匡衡の活躍と位置づけ

和泉式部と『和泉式部日記』

四三〇

浮かれ女和泉式部 噂の中の素顔 父母と少女時代 幸福な結婚生活 為尊親王との恋 和泉のあこがれと自負感 敦道親王との恋 『和泉式部日記』の世界 『和泉式部日記』の特質 愛のかなしさをうたう和歌 晩年の和泉式部

『源氏物語』の世界

四五三

謎の半生 式部の血統 『源氏物語』の胎生 『源氏物語』の構造と成りたち 光源氏の生いたち 賜姓源氏の意味 好色人光源氏 失意から栄光へ めでたき宿世の裏面 宮仕えの紫式部 孤独なる魂 女三宮 因果はめぐる 若き世代の反逆 紫上の死 道心と愛 魂の救済 『源氏物語』完成 式部の晩年

参考文献

日本文学年表

卷末参考図（平安京条坊図・大内裏図・内裏図）

あとがき

装幀 大森 忠行

四八六
四八八
四九六
四九九

執筆者（五十音順）

青木 和夫 秋 山 虔 今井 源衛 梶原 正昭
 角川 源義 木村 正中 藤岡 忠美 益田 勝実
 武者小路 穰 村山 修一 目崎 徳衛 山中 裕

本巻協力者

浅野 喜市 岩野 俊夫 柿 本 埏 河瀬虎三郎 小玉 光雄
 小町谷照彦 鈴木日出男 中村 義雄 野村 純一 藤岡 由夫
 前 登 志夫 八嶋 正治
 蔵島神社 北野神社 九州大学文学部 京都国立博物館 宮内庁 宮内庁
 書陵部 高山寺 五島美術館 神護寺 東京国立博物館 徳川黎明会 藤
 田美術館 平凡社

写真特集

怨霊を恐れる人々
 木地屋祖神の惟喬親王
 灯火具のいろいろ
 詩文の宴
 貴族の邸宅
 屏障具（へいしょうぐ）
 乗り物
 賀茂の祓
 遊 戯
 地獄絵
 勝負ごと
 清涼殿
 出産とその祝い
 化粧
 旅すがた
 みちのくの歌枕
 王朝の服飾美
 貴族の信仰生活
 『源氏物語』のひとびと

宮廷サロンと才女

京都御所



暮れゆく大和・新しき王都

万葉最後の日々

山陰の雪はかたい。おやみなく降りつづく雪のなかに、因幡（鳥取県）の国庁では元日の賀宴が開かれていた。国司大伴家持は、その雪を見つめながら、未来へのあつい祈りをうたわずにはいられなかった。

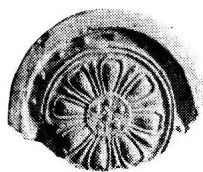
新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け
吉事

これが『万葉集』全二十巻の最後の歌となった。天平字三年（七五九）のことである。その同じ年、唐からの苦難にみちた渡航を経て大和（奈良県）にたどりついた鑑真は、都の一角に、故新田部親王の宅地を賜わって、大寺院の建設に着手していた。新しい戒律伝導の教えの拠点、唐招提寺の創建である。滅びゆくもの

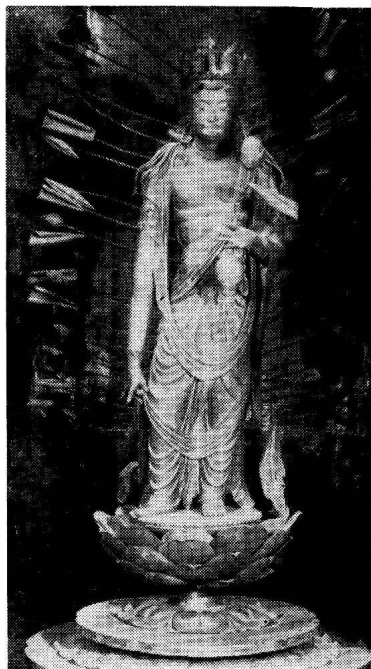
と新しきものとは、何を思い、何を感じていたのか。

一昨年（七五七）の初秋、鑑真にも家持にも、いや當時の人々すべてに忘れがたい事件が、奈良の都に起きた。いわゆる橘奈良麿の変である。それは左大臣橘諸兄の子、参議奈良麿をリーダーとするものであった。じつは当時、藤原仲麿は、光明皇太后・孝謙天皇母娘の信頼を得て急速に勢力をのぼし、大納言から紫微内相という大臣待遇の新設の官に就任していた。その横暴は大炊王を皇太子につけるにいたって、橘氏をはじめ、皇族・丹治比氏・大伴氏・佐伯氏ら古来の名門豪族の憤りを爆発させた。

橘奈良麿以下の貴族たちは、七月三日早暁を期して仲麿を殺し、皇太子大炊王を廃立する計画をたてた。



緑釉瓦当（平安京出土）



光明皇后のおもかげ 法華(はつげ)寺の十一面観音は美貌の后(きさき)光明子の姿をうつしたものと伝える。するどい面もち、ととのった衣文(えもん)の線、そしてふくよかにただよう官能美は、貞観朝(へんご)朝(八五九―八七六)の作風を示している。動きを秘めて立つ像身はもとより、天衣・蓮肉にいたるまで一本づくりで、髪、眉、唇などにわずかに彩色をほどこした檀像彫刻の傑作。国宝。高さ九九センチ。

しかし密告によって計画は仲麿側にもれた。仲麿は光明皇太后の権威にすがった。決起の前日、皇太后は奈良麿のほか、皇族三人と大伴氏の代表古麿をよびだして訓戒した。その間に仲麿は兵を動員、自邸にもどった五人をはじめ、与党を一挙に逮捕した。

平城宮の獄内での尋問は峻烈(しゅんれつ)をきわめた。刑吏のふるう杖下(じょうか)に、一同はつぎつぎに絶命(せつめい)していった。女帝が罪一等を減じて流罪(りうざい)すると詔(みことづかひ)したとき、すでに

首謀者のほとんどは殺されていた。親、兄弟もあるいは流刑、あるいは免官となり、友人というだけで左遷される者もあった。

家持は決起にこそ加わらなかったが、親族は古麿をはじめ多数が処刑されたし、首謀者である橘左大臣家とは、その宴席につらなるほどの旧知の間柄でもあったから、なんらかの弾圧をうけたとしてもふしぎではなかった。しかし、事件当時は兵部省(ひょうぶしょう)の次官であった彼が、やがて右中弁(うちゆうべん)という要職へ栄転したのは、仲麿の大伴一族分断の策にのせられていたためであろうか。だから一年もたつと、はるか山陰の一地方長官として赴任させられてしまうのである。

鑑真にとっても、事件の首謀者の一人大伴古麿は、かつて鑑真一行が遣唐使帰国の船に便乗して渡日の志を果たそうと願ったとき、唐の国禁をおもんばかって逡巡(しゆんじゆん)した大使藤原清河(きよかわ)とは違って、理解のある態度で敢然とひきうけてくれた副使であった。また、新寺造営のために下賜された宅地も、古麿の斡旋によるもので、故新田部親王からその子道祖王(みちそ)王へ相続され、王の刑死により朝廷に没収されていた物件であった。

記録によれば、この事件の関係者は死刑と流刑だけで四百四十三人。ちなみに当時の貴族層、すなわち五位以上の高位高官の家々は百数十家にすぎない。朝廷とその周辺の人士で、事件になんらかのかかわりをもたぬという者は、ほとんどいなかったのである。

湖畔の末路

さて、奈良暦の変によって反対派を一掃し、兄の左大臣豊成をすら、その子

が奈良暦に親しく、豊成自身も一味の尋問に手ぬるかったという理由で、大宰員外帥に左遷してしまった仲麿は、大炊王を即位させて淳仁天皇とし、みずからは恵美押勝と称し、まず太保、ついで太師に就任した。

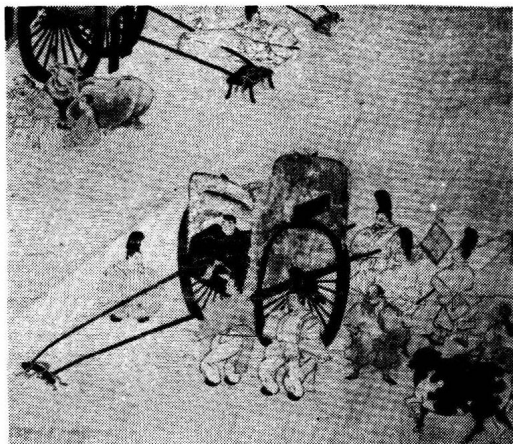
右大臣を太保、太政大臣を太師とよばせたのみならず、おもな官名をみな中国風に改称したことからもわかるように、政権を完全に握った仲麿が展開した新政策には、新奇をてらったものが少なくなかった。もっとも一方では、問民苦使を全国に派遣して人民の苦しむところを問うたり、米価の安い秋に大量に米を買いあげて高騰するとこれを放出する常平倉を新設して米価の調節を計ったり、さらに調・庸などを負担する年限を短縮し、雑徭という徭役労働の日数も年間六十日

薬師寺のかわら版



孝謙天皇のころ、岡山県にあった官営の採鉄坑での話。ある日、十人の坑夫が採掘にはいったとき、突然大音響とともに坑口がふさがれ、九人は脱出したが一人だけ坑内に閉じこめられた。圧死と断定され、遺族たちは葬式をすませた。

こちら坑内に残った男の独白。「たった一つの心残りは法華経の写経を残したこと。もし助かったら、まずそれがしたい」。ふと見ると穴のすきまから一人の僧が食物をもつてきて「君の奥さんから飲食を供えてたのまれたので、救ってやりたいと思ってやってきた」そういつて出ていった。彼は頂上からさす光に向かって叫んだ。「助けてくれ」。遠くで蚊の鳴くような声を聞きつけた通行の人々が、坑口に機械をすえ綱を下して男を救出した。あの僧は観音であつたらうか。人間世界から隔離されて何百時間、死と直面してきた一人の男の体験を、『日本霊異記』の作者薬師寺の僧景戒は、このようなローカル記事として報じている。男の独白のなかで法華経の写経を大きくクローズアップすることも、このかわら版記者は忘れない。



大伴古麿 『東征伝絵巻』第五巻巻頭部分、遣唐副使大伴古麿が参内して、鑑真和尚が大宰府に到着したことを奏上するところで、いましも牛車から降りようとしている古麿の姿が描かれ、活気にみちたさまがうかがわれる。詞書には「我朝孝謙天皇天平勝宝六年甲午正月十二日大和尚筑志の大宰府につきたまへるよし副使従四位上大伴宿禰古麿奏聞す……」と記されている。

から三十日に半減するなど、民政にも意を用いた。貴族たち支配層のあいだに、自分にたいする批判的な空気がただよっていると知った独裁者は、しばしば一般人民の人氣を得ようと腐心するものである。

だが、何年かたつと、仲麿も氣をゆるめた。おのが官職位階はもちろん、子どもたちにまで高位頭官の座につかせ、そろって参議に任ずるなどは、他の貴族たちの反感を無視した行為といわなくてはならなかった。

また、おりからの新羅の日本にたいする態度をことさらに問題にし、全国に命じて船を建造させ、水軍を動員、新羅語の通訳まで養成して開戦準備を整えたが、対外的緊張感をあおることで国内の不満を押えようとするのも独裁者の常である。

しかしその間、仲麿の權威の根源であった孝謙前女帝は、母の光明皇太后を失った寂しさもあってか、宮中に入りしていた僧道鏡に近づきはじめていた。はじめは氣にもとめていなかった仲麿も、やがて度がすぎると見てとると、淳仁天皇を通じて女帝に注意した。激怒した女帝はおりから道鏡とともに滞在していた琵琶湖畔の保良の離宮から急ぎ帰京すると、母の創建した法華寺にこもって、「祭祀と小事は天皇が裁決したらしい。国家の大事と賞罰は朕が行なう」と宣言した。

それから二年余、仲麿はついに兵を動員した。また密告をうけて、いち早く貴族たちによびかけた女帝のもとには、他氏はもちろん、仲麿一家以外の藤原氏のほとんども参加した。天平宝字八年（七六四）秋、琵琶湖畔の小舟の上で、仲麿は妻子とともに追手の軍に捕えられ、斬られた。淳仁天皇は淡路島に監禁され、幽

憤の一年を過ごしたのち、垣を越えてのがれようとして失敗し、翌日死んだ。

殺戮六年

女帝は復位して称徳天皇といった。道鏡は太政大臣禪師、ついで法王とよばれる。

腹心の僧たちも法参議と称して政務に参与し、道鏡の実弟は大納言になった。しかし僧たちは行政の実務に暗く、実務は貴族たちが執らざるをえなかったことが、事情をいっそう複雑にした。

僧として、道鏡とはおよそ正反対な生涯を送った鑑

真は、仲麿の乱の前年に唐招提寺で没していた。因幡守から榮転して都にもどった大伴家持は、仲麿政権の末期、二、三の親友と仲麿暗殺計画を練ったが発覚して薩摩守に左遷されていた。道鏡時代の彼は、大宰少弐に任ぜられたということ以外には、消息が知られていない。万葉の歌もすでに絶えていた。「歌わぬ家持」、後世の学者は、天平宝字三年以後の彼をそうよぶ。

道鏡時代に政治らしい政治は一つとして行なわれなかった。ただ道鏡たちの望むままに、西大寺をはじめ諸寺が善美をつくして造営され、女帝らのためには、平城宮のなかに瑠璃の瓦でふいた玉宮とよばれる宮殿

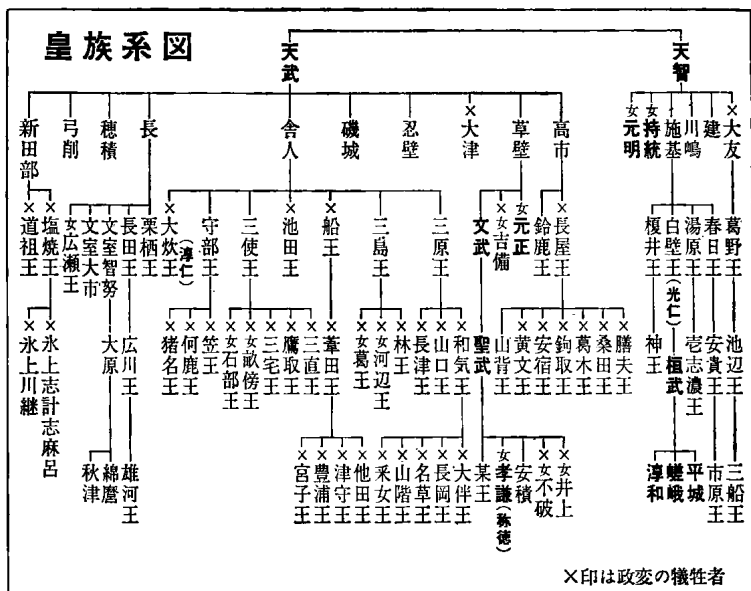
も完成披露された。その間女帝は、皇位をつぐ可能性のある皇族や、これと親しい貴族たちを、つぎつぎに処刑した。あるいは道鏡に位を譲ろうとでも、本気になって考えていたのかもしれない。しかし道鏡の望んだその計画も、宇佐八幡の神託を聞いてきたという和氣清麿の直言に打撃をうけた。そして神護景雲四年（七七〇）秋、五十三歳で女帝が没すると、貴族たちはいっせいに立ちあがって道鏡を法王の座からひきおろし、下野（栃木県）の薬師寺に追いやった。

この六年ばかりをふりかえった貴族たちは『続日本紀』にこう記している。

藤原仲麿邸の跡 平城左京四条二坊にあった仲麿の田村第付近には家持と交渉のある大伴田村大麿の邸もあった。現在では水田の中に建物の跡らしい土壇をとどめている。あたりは木がおおい茂り、すぐ北にある変電所とのあいだを三条通りが貫き疾走する車のほこりにまみれている。



皇族系図



×印は政変の犠牲者

「太師誅せられてより、道鏡権を擅はたらにして、輕々しく力役りきやく（勞役の仕事）を興し、務めて御藍がらん（寺院）を繕つくろへり。公私彫喪てうさう（意氣消沈）して、國用足らず。政刑せいけい（政治上の処罰）日に峻きびしく、殺戮ころころ妄あたりに加へき。故に後に事を言ふ者、頗すこるその冤むじつなるを称せり」

沈く白壁 称徳女帝の病が重くなるころから、つぎの天皇をめぐつて、貴族たちの暗躍が始まっていた。だれに決まるかは、一族の浮沈にかかわる問題だったからである。

ふだんと違って、こんどは選拔の範囲が広い。女帝に子がないばかりか、井上・不破両内親王ら姉妹を除くと、近い親族も「政刑日に峻し」かった結果、とだえていたからである。「皇族系図」を見ていただきたい。政変に関連して処分されずにすんだ皇族は、すでに死んでいた者ばかりである。女帝の同母弟基王もとこ（某王）も、異母弟安積親王あさかもいまはない。親族を見まわすと、どうやら無事なのは長親王系の子孫だけである。

病床の女帝の意識もさだかでなくなったとき、かねてから女帝の信用厚かった右大臣吉備真備きびのみかびらが皇太子に立てようとしたのは、長親王の子で臣籍に降下して